

いとう いさお
伊藤 功

雑感・・・次代に何を引き継ぐのか

●自治労・書記長

運動をすすめる中で、何を大事にし、伝えていくのか。常に問いかけの毎日である。労働運動について何が正しいのかはわからないが、自分の青年時代を思い返してみる。

残念ながら、自分が目指したものは今の職業ではない。よもや自分が公務員になろうとは思っていなかったが、役所に入職したのが25歳。登庁日に労働組合からの加入説明会と交流会が行われた。思い起こすと、当時の単組執行委員長や書記長が何を言っているのかさっぱりわからなかった。学生時代に学んでこなかった言葉が次から次へとでてくる。みんなが加入しているのだから、入ろうという考えだけだった。しかし、入職3年目には執行委員、今や公務員すら辞めて労働組合運動の専従に。

いつの間に労働組合と労働運動の基本を理解してきたのか。今思うと、職場の普段の会話と行動の積み重ねとしか言いようがない。大事なことは職場の雰囲気。自分が経験した職場は総務、企画に始まり、税務、国保年金、農林など多くの職場を経験してきたが、とにかく多くの会話で溢れていた。

業務に関わる話はもちろんのこと、喜怒哀楽、雑多な話題で溢れる中、とくに働き方に対する問題意識、権利意識は強かった。「昼休みの休憩時間が60分とれなかった。これはおかしい。」「業務が終わらず、残業するのもおかしい。」「休日に仕事をするのはおかしい。」等など。働き方に対する一人ひとりの問題意識とチェックがきちんとしていた。お

かしなことがあれば、すぐに職場長（管理職）に指摘し、改善させる。稀に問題意識の低い職場長がいたが、その場合は、みんなで職場長の席を取り囲んで謝罪をさせる場面もあった。

また、年次有給休暇をはじめ様々な休暇の取得も、計画的に休もうよという雰囲気づくりと会話が日々飛び交い、この繰り返しだった。職場単位での交流も職場長も交えてかなり盛んに行われ、昼間の職場長交渉とは別に、良い意味でも夕方以降の職場長交渉（無礼講の宴席）も多かった。こうしたことがなぜできていたのか。

労働組合としての監視（チェック）体制がそのひとつ。各職場には職場代表委員（評議員）と執行委員が必ず1人いた。日常的な会話による相談（普段の会話）と執行委員会（週1回）が繋がっていた。とくに、執行委員、職場代表委員、組合員それぞれが普通に会話をしながら、本人が気づかない事も相互の会話を通して、課題であることに気づき、すぐさま要求としてまとめようとの雰囲気があった。執行委員会も丁寧な点検と話し合いをするので3時間程度は普通に、場合によっては時計の針が翌日になることもあった。闘争期の運動だけではなく、日常的に改善要求ができていた。

働き方については、とにかく新しい業務が増える場合は気を付けていた。そのことによって必ず労働時間は延長されるので、みんなで話し合い、単純に新しい業務を追加される



のではなく、労働荷重にさせないためにどうするのか、当局を質す行動ができていた。

また、自信をもって普段の行動・活動ができるよう、その根拠づけのための学習会もたくさんあった。何日かに分散しながら、すべての組合員が年休取得で参加できるように組み立てられ、限られた時間の中で聞くことができなかつたことは、必ずセットで行われる交流会を通して理解を深めていた。

とくに、毎年4月は「権利手帳」をもとに自分たちの賃金と労働条件について理解しあう学習会があたりまえの雰囲気づくりをつくっていた。

賃金についても、生活改善と同一労働・同一賃金の視点から、先行する単組の年齢別の到達状況と比較しながら当局に要求する。獲得した内容は在職者調整として全ての組合員に反映させる。組合員一人ひとりの個別賃金台帳の整理と毎月の点検を行い、当局の誤りを是正させる。すべてがすべての組合員に関わること＝みんなは一人のために、一人はみんなのためにという理解が職場全体にあったからにほかならないと考える。

もちろん、闘争期（3月春闘、6月人員確保闘争、10月現業・公企統一闘争、11月秋季確定闘争）も、それぞれの目的がありみんなが理解し参加していた。いずれも統一行動を背景に闘い、納得できない場合は、統一行動

の戦術行使を行うのが常だった。要は納得できないものは、自分たちの権利を最大限行使して、意思表示を行う。誰ひとりこぼれることなく、本当の団結があった。

だから当局も余計なことはできない雰囲気職場全体にあったと振り返る。自分が委員長の時も同様であり、次につないできた。

また、自分の単組だけではなく、同じ産別自治労の青年部同志の交流や産別を越えた青年同志の交流はいい学びの場となった。賃金・労働条件を抑制する動きや考えは何処の当局も仕掛けてくることは共通している。結局、根本的な社会全体の仕組みや政策に課題や問題があることも、その当時の相互交流で理解し、政策課題に対する運動や政治闘争も昼夜問わず、楽しみながら、みな熱心に取り組んだ。共通する課題・攻撃に対しても、庁舎内座り込みや移動交渉など様々な支援行動で支えあい、歯止めをかけるなり、撤回をさせてきた。

いろんな人がいて、いろんな価値観がある。それでもなお変わらないのは、労使の関係である。労使は常に綱引きであり、終わりはない。少なくとも、同じ労働者間に格差はあってはならない。労働者が持つ権利とその行使に拘りを持って行使し、それでもなお不足する課題の克服に向け、みんな運動を進めること。一人の百歩より百人の一步の運動を引き継いでいきたい。